

自然を歩く 7

【アカザの杖】

もう大分前のことで正確な期日は覚えていないが、十石峠に向かう途中の群馬県上野村に知人を訪ねたことがある。あいにく尋ね人は不在であったが、村を歩いていたお婆さんがもっていた杖に眼がいった。風情のある軽そうな杖であり、どうしたものですかと尋ねたら、アカザの杖だと言った。どうして作るのですかという問いに畑に雑草のアカザが生えたらよさそうなのを抜かずに残しておくのさと言った。そして秋になったら畑から抜いて、少々磨いて杖にするという。最近、庭の畑で春になるとやたら生える雑草のなかのアカザを一本抜かずに秋まで育ててみた。二メートル以上になったが、確かに茎は木本化していて乾燥すれば軽い杖にできた。芭蕉の句に「やどりせむあかざの杖になる日まで」がある。岐阜の妙照寺の住職・己白への挨拶句であるが、芭蕉が農民の自然に関する実用的な知識にも詳しいことに驚く。杖になるまでには数ヶ月かかるけど、芭蕉は妙照寺にどのくらい滞在したのか知りたいと思った。挨拶とはいえ、句の意味からすれば、長逗留を要望しているようにもみえる。